氏　　名	岡　部　大　祐
学位(専攻分野)	博士（国際コミュニケーション）
学 位 記 番 号	博国コ甲　第13号
学位授与の日付	2014年9月27日
学位授与の要件	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号） 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	参加型がんチャリティ・イベントにおける参加者間での病気に基づく差異の創出とその調整の過程 ―「医療従事者」と「がんサバイバー」のコミュニケーションの相互行為的ポジショニング分析から―
論 文 審 査 委 員	主　査　教　授　　抱　井　尚　子 副　査　教　授　　末　田　清　子 副　査　准教授　　猿　橋　順　子 副　査　教　授　　田　崎　勝　也 副　査　教　授　　井　川　　肇 副　査　立命館大学教授　佐　藤　達　哉

論文内容の要旨

岡　部　大　祐

1．問題の所在

本論文の目的は、近年増加を見せる参加型がん啓発チャリティ・イベントにおけるコミュニケーションに注目し、特に病気をもった参加者とそうでない参加者との間で、病気という自他を分ける区分が立ち上がり、その差異化によって引き起こされる参加者同士の分断過程の一端を明らかにすることである。

周知のとおり、がんは、1981年に脳血管疾患を抜いて、日本人の死因第1位であり続けている。このような背景を受けて、2006年には厚生労働省が「がん対策基本法」を制定し、今やがんは国家的な取り組みの対象になっている。

20世紀においては、病気を患う者がケアやサポートを受ける中心的な場は、医療機関であった。しかし、がんのような慢性疾患では、病者は医療機関の中で治療の対象となる「患者」として医療従事者と関わるよりも、医療機関の外で家庭や職場で、家族や同僚などの他者と過ごす時間が必然的に長くなる。また、在宅医療や外来化学療法の整備、医療機関の入院期間の短縮へ向けた動きもこれに拍車をかける。医療機関の外で生きる病者は、必要に応じて周囲から支援を受けながら生活することになるだろう。そのような支援を受ける上で、周囲の人間からの理解は欠かせない。特定の属性を理由に社会生活において不利な立場に立たされたり、十分な支援を受けられなかったりすることで排除されることのない包摂的な社会（inclusive society）の構築には、互いの差異を尊重するべきといった心構えに留まらず、市民ひとりひとりが、いかにして多様な他者と協働していくことができるのかを考えていかねばならないだろう。

がんを取り巻く社会文化的状況は刻一刻と変化しており、医療中心のケアのみならず、がん罹患者の雇用問題を筆頭に、市民のがんやがん罹患者に対する理解に根差した、地域社会によるケア、サポートの重要性が高まっている。近年、医療機関の外部でのコミュニティ・レベルの新しい形のがん患者のケアやサポートの場が生じてきており、地域市民へのがん啓発及びがんサポートへの活動である参加型がんチャリティ･イベント（以下、単にイベントと略す）は、がん共生時代の新しいサポートのひとつの形として見なすことができる。イベントは、がんの予防、検診の促進、がんの治療法などをはじめとした知識の普及（ヘルス・プロモーション）、がん患者同士での情報交換や心理的サポート（ピア・サポート）、患者と患者以外の住民との交流、がん研究のための資金集めなどの多様な機能をもち、マラソンやウォーキングなどのスポーツ的要素を組み合わせ、一般市民の幅広い参加を可能にする。

従来の研究では、参加型のチャリティ・イベントを、特定の価値観を称賛し、人びとの経験を形作る権力の（再）生産の場としてとらえようとする批判的な研究から、イベントを肯定的にとらえ、その成否の要因を探求する研究まで、イベントに対する異なる見解がある。

このようなイベントについての研究者の評価は大きく分かれており、イベントを肯定的に評価し、その活性化のために、人びとのイベント参加やイベントでの寄付額などに影響する要因を探求する研究もあれば、逆に、イベントは民族、人種、社会的地位などの差異による医療の不平等を「がんサバイバー」というラベルで覆い

隠し、生物医学的技術を信奉させるイデオロギー的装置としてみなすといった、イベントの権力性を問題視する否定的な研究もある。

しかし、上記のような研究はいずれも、イベントが「参加型」であるということ、そして「多様な市民が参加すること」という特徴から生じる、イベント参加者たちのコミュニケーションの側面を看過している。前者の研究では、多様な背景をもち、動機づけもさまざまな参加者同士のコミュニケーションは、常に「良好」な関係を保証するものではなく、時に、否定的な参加者同士の関係を創り出すことさえある媒介変数的な側面が認識されていない。後者については、参加者がマクロ社会的なイデオロギーに対して受動的な存在として措定されており、参加者同士の相互作用による創造的側面を過小評価しており、また、経験的データに基づく主張が十分でない。

本研究では、イベントが包摂的社会の構築に向けてのひとつの事例となりうると考え、イベントに対して肯定的な立場を採る。しかし、同時に、イベントにおいて生じうる否定的な影響の可能性にも注意を払う。以上の立場から、本研究では、先行研究群ではその重要性に比して十分探求されているとはいいがたい、イベント参加者たちのコミュニケーションに照準する。その上で、本研究は、イベント参加者たちの間で不可避的に立ち現われる「当事者性」の問題、すなわち、「がん」か否か、あるいはがんとの関与度による参加者同士の差異化という現象に注目した。その理由は、病気に基づく差異化は、イベント参加者を序列化し、排除を生む可能性を孕んでいるからである。以上を踏まえ設定される本研究の問いは、参加型がんチャリティ・イベント参加者たちの間に、どのようにして病気に基づく差異が創り出されるのか、また、参加者たちはその差異化にどのように対処していくのか／いけるのか、である。

以上の問題意識から、本論文では以下の下位設問に答えることで、研究設問に対する回答を提示する。設定した下位設問は、以下の４つである。すなわち、どのような時に病気に基づく差異化が起こるのか（下位設問１）。差異が生じた場合、イベント参加者たちは、どのようにして差異を管理・調整して分断に対処するのか（下位設問２）。イベント参加者たちは、どのようにして差異を管理・調整できなく（あるいはしなく）なり、分断されていくのか（下位設問３）。イベント参加者たちが分断されていく過程で、どのようなマクロ社会的に利用可能なディスコース資源が喚起されるのか（下位設問４）。

2. 対象と方法

本研究では、先行研究における経験的研究が過小であることによる探索的性質を鑑み、質的研究デザインを選択した。本研究の研究デザインでは、Coupland & Jawarski（2009）に倣い、社会的構築主義（social constructionism）の哲学的前提のもと、事例研究を含む比較的少ない事例を扱い、詳細なコンテクスト記述に基づいた意味の生成過程の分析に焦点を当てる。本研究では、人びとの間には多種多様な差異があるにもかかわらず、どのようにして特定の差異（病気）が意味のあるものとして創り出されるのか、という現象の在り方（how）を問う。

本研究では、参加型がんチャリティ・イベントである「リレー・フォー・ライフ（Relay For Life、以下RFLと略す）」の参加者のコミュニケーションを事例として選択した。具体的な分析対象となるデータには、（1）筆者を含むふたりのRFL参加者の間で交わされた（調査目的で引き出されたのではない）電子メールのやり取り、（2）後日行われた２度のRFLを振り返ったインタビュー約８時間半を書き起こしたものを用い、（3）イベント主催団体発行の「会報」と、（4）筆者による参与観察のメモを補足的に利用した。

本研究では、方法論的枠組みとして、社会的構築主義を背景とした、認識論的ディスコース心理学（discursive psychology、以下、DPと略す）（Edwards & Potter, 1992; Korobov, 2010, 2013; Potter, 1996; Potter & Wetherell, 1987）と、そのディスコース分析の方法を採用した。ここでいうディスコース（discourse）とは、人びとの言語使用（language in use）を表す。

DPは、20世紀後半に、主に英国を中心として、社会心理学における言語論的転回を背景に興ってきた研究アプローチである。DPは、ミクロ社会学の一派で、H.ガーフィンケル（Garfinkel, 1967; ガーフィンケル, 1987）を始祖とする日常生活における人びとが用いる方法（エスノメソッド）を探究したエスノメソドロジー、その派生形である、会話の組織化をミクロに分析する会話分析、言語使用の遂行的性質を理論化した発話行為理論を基盤として展開してきた。DPのディスコース分析では、言語の行為遂行性を前提とするため、性別、年齢、職種等の社会的属性や、個人の信念、態度、パーソナリティのような内的属性による行為の説明を採らない。DPは、語り手が自他や事物について記述をする際、どのように自らの利害関係（stake）やアイデンティティ等を調整し、自分自身や自分の行為に説明を与えるためにどのようなディスコース資源を用いるかに関心をもつアプローチ

である。

3. 本論の構成

序論では、本研究における問題関心の背景を提示し、本研究で探求する問いを設定した。また、研究のアプローチを素描し、本研究の全体像を提示した。

第２章では、先行研究を検討し、本研究の位置づけを明確化した。まず、20世紀後半から生じてきた病気をテーマとした参加型チャリティ・イベントの歴史と、イベントに対して批判的な研究と、肯定的な研究群を概観した上で、どちらの研究群においても、イベントがもたらす成果・結果に焦点が当てられており、その成果が生じる過程を構成する参加者同士のコミュニケーションに対する視点の弱さが指摘される。その上で、イベント参加者たちのコミュニケーションにおいて浮上する「当事者」性の問題に対して、病者の病気経験の理解を探求してきた病いのナラティヴ研究を概観し、この理論的枠組みが、(1) 固定的な関係性を前提としていること、(2) 個人の経験を理解することに焦点化していること、(3) 言語の表象的側面に依存した分析に終始する傾向が強く、「患者の声」の特権化につながっていること、(4) 分析対象とするナラティヴが引き出された、まとまりをもったものに限定されがちであること、以上の４つの点において限界を同定する。イベント参加者たちのコミュニケーションを捉えるためには、(1) 参与者の関係の流動性を捉えられること；(2) 個ではなく状況づけられた対人コミュニケーション的な視点をもつこと；(3) 語られた内容のみならず、語りの行為も分析手順に含むこと；(4) まとまりをもったナラティヴ以外の要素も捉えられること、これらを満たす枠組みが求められることを論じる。

第３章では、本研究の理論的枠組みとデータ分析ツールを整える。まず、本研究で依拠するディスコース心理学の歴史的背景や視点を概観し、経験的データの分析に向けて、主要な分析概念を整備する。ここでは分析の鍵概念となる「指標性 (indexicality)」(De Fina & Georgakopoulou, 2012) について説明したのち、第２章でのレヴューを通じて同定した既存の枠組みの限界を乗り越えるために、ナラティヴへのディスコース・アプローチを主導するマイケル・バンバーグ (M. Bamberg) らによって提唱されている「スモール・ストーリー (small stories)」(Bamberg & Georgakopoulou, 2008)、「ポジショニング (positioning)」(Davies & Harré, 1990; Bamberg, 1997, 2003, 2004a, 2004b; Deppermann, 2013) を分析概念として導入した。

第４章では、第５章の事例研究で扱うデータの背景、データの構築過程を含む、

調査の概要を記述する。その中では、事例研究のトピックとなるチャリティ・イベントである「リレー・フォー・ライフ（RFL）」の概要の記述も行い、イベント主催団体発行の「会報」や参与観察のメモを駆使して、データを分析する上で重要だと考えられる、イベントの明示的・非明示的な規範性を含む、前提的コンテクストを記述している。

第５章では、ふたつの事例研究を提示した。事例研究１は、RFL初参加の女性（ケイコさん､医療従事者）とOD（筆者､がんサバイバー／がん患者）との電子メールで、RFL参加に向けてのやり取りから、RFL終了後までの一連のやり取りが、ポジショニングに依拠して経時的に分析される。分析は、４つのフェーズに分割され、フェーズ１から３までの「知り合いになる会話」（シルヴァスティン，2011）においては、病気に基づく差異化が生じた際に、ケイコさんとODの両者は、互いのポジショニングを適宜修正し､「RFL参加者」という共通のアイデンティティを構築･維持するディスコース実践を展開する。しかし、フェーズ４に入り、ケイコさんが、RFLに共に参加した友人からRFLを巡って否定的なメールを受け取ったことを契機として、ケイコさんとODのやり取りは、不満語りへと形を変えていく。両者がRFLでの出来事やRFLに対する不満を語る過程で、病気に基づく人びとの差異が喚起され、ケイコさんとODとの関係性は大きく変容していく。ケイコさんがケンカ相手の友人（がん患者／がんサバイバー）や､その他のRFL参加者である「がん患者／がんサバイバー」への否定的なポジショニングに従事していく中で、ナラティヴの次元（narrated event）で構築される「ケイコさん＝医療従事者＝被害者」対「友人、その他の参加者＝がん患者＝横暴､非理性的」という対照構造が繰り返し構築される。このナラティヴの次元での対照関係が、ナラティヴの次元と、ナラティヴを行う次元（storytelling event）のつながりを示す直示表現を介して、ナラティヴを行う次元の語り手（ケイコさん）と聴き手（OD）が結び付けられ、両次元に並列構造が構築される。このような関係性が繰り返し創られていく中で、メールの応答語数やメールの送信・返信といった相互行為の構造にも対照性が現れ、ケイコさんとODが分断していくことが、分析によって示された。また、このような差異化の反復が修正されずに生じる過程には、語られた内容に焦点があたる傾向にあるナラティヴというコミュニケーションに対する人びとの意識（イデオロギー）が関与していると考察した。

事例研究２では、事例研究１における差異化から分断の過程の理解を補完することを目的として、これらの分断過程で喚起されていたと考えられるマクロ社会文化

的なディスコース資源である解釈レパートリー（interpretative repertoires, Edley, 2001; Potter & Wetherell, 1987）の分析を行った。分析には、事例研究１と同一のRFL参加者であるケイコさんと筆者とのインタビュー・データを用いた。分析には、社会構成主義的グラウンデッド・セオリー（Charmaz, 2006）のコード化の手法を援用した。分析により、がんサバイバーを他者化し、ケイコさんが自らをRFLから切り離していくナラティヴを構築する４つの解釈レパートリーを見出した。すなわち、(1)「医療従事者」を被害者として、主として患者を医療従事者に負担を強いる加害者として構築する「強制される医療従事者」のレパートリー、(2) 精神的な異常をもつ理解不能な存在として「がん患者」を構築する「精神的な病気」のレパートリー、(3) 関係者を二分法で捉え、一方が他方に（理不尽に）権力を行使するという筋書きで分断を説明する「排除」のレパートリー、(4) 極端な相対主義的で、差異の存在による相互理解の不可能性を構築する「個別性」のレパートリー、以上の４つである。

第６章では、ふたつの事例研究を踏まえ、イベント参加者の間で病気に基づく差異がどのように生じ、差異が引き起こす距離化、分断に対して、参加者がどのように対処していったのか総合的に考察した。(1) まず、病気に基づく差異化がどのようなときに生じるのかを考察した。本研究の事例においては、参加者同士のコミュニケーションの中で、イベントの正当な成員性を示す必要が生じたときに、病気に基づく差異化の契機が見られた。(2) 次に、病気に基づく差異化が生じたとき、どのようにしてこれに対処していたのか、その方法を考察した。これらの差異により、互いが分断されていく可能性が生じたときに、イベント参加者たちは、どのようにして差異を管理・調整して「問題化」させないのか。本研究で見出した参加者たちの実践は、(a) 互いの差異を創出するような話題の「トピック化の回避」、(b) 互いに割り当てられる社会文化的アイデンティティ範疇による差異を解消するために、範疇を連続体のように扱い、その範疇に自らが当てはまらないようにする「範疇のずらし」、(c) 特定のアイデンティティ範疇が喚起され、お互いが差異化される場合に、それとは異なる互いの範疇が喚起されるような、別のコンテクストを参照する、「異なるコンテクストの参照」といった方法で、互いの関係性を修復するものであった。(3) 最後に、病気に基づく差異が顕在化し、相互の関係も分断へ向かっていくにもかかわらず、それに対処しない、あるいは、できなくなる過程とその方法を考察し、(4) その過程にコミュニケーションの生起するミクロ・コンテクストを越えたマクロ社会文化的なディスコース資源がどのように「今、ここ」で展開する分断過程に関与

してくるのかを考察した。イベント参加者たちの間で、病気に基づいた差異が強化されていき、関係が分断されていく過程のひとつの側面は、第５章の分析で示したように、ナラティヴのふたつの次元に並列的な構造が繰り返し喚起され、聴き手であるODに対する否定的なポジショニング効果を生み出していたことであった。さらに、この過程で差異化と分断の修正が為されなかった理由のひとつとして、ナラティヴというジャンルについての意識（イデオロギー）がこの過程に関与していると考察した。すなわち、語りによって創り出される相互行為的効果よりも、語られた内容の方が、コミュニケーション参加者たちに強く意識化されるため、両者の意識を越えたレベルで確実に互いの差異が強固なものとなっていき、関係の分断に貢献していった可能性を示唆した。これらの病気に基づく差異と分断の生成過程の考察を踏まえ、病者のステレオタイプの再生産を促すような解釈レパートリーの存在を認識し、それに替わるレパートリーを、イベントを通じて創り出していくことの重要性を述べた。本研究の学術的貢献として、研究事例の新規性、従来までの病いのナラティヴの枠組みのコミュニケーション論的拡張、研究者のエンパワメント志向性を相対化する方法論の適用が考えられた。実践的意義として、過程・行為志向的視点による対立解決可能性と、日常における偏見の実践について述べた。

最終章では、本研究のまとめを行ない、結論を提示した。最後に、本研究を再帰的視点から検討した上で、研究の限界と今後の研究の方向性について展望を述べ、論を結んだ。人びとは一般に（意識的であれ、無意識的であれ）特定の目的をもってコミュニケーションに従事している。「医療の縁側」とでも呼べる、多種多様な背景をもつ人びとが病気をテーマに集う参加型チャリティ・イベントにおいて、参加者たち同士の知り合いになる儀礼的な会話や、不平不満を言い合うといったコミュニケーションの過程で、病気は互いを包摂あるいは分断するものとしてその姿を現す。病気と共に生きる人を含めた共生社会を構想するならば、これまで積み重ねられてきた個々の体験ナラティヴから「病気の意味」を読み解こうとする静的なアプローチのみならず、特定の状況で、特定の他者との間で、特定の目的の下に行われる相互行為、ディスコース実践において、自他の「間（inter-）」に現れる「病気の意味」を捉える動的なアプローチ､コミュニケーション論的なアプローチが要請される。その経験的研究の遂行と蓄積は、いかに人がつながりうるのかの洞察を与え、多様性を活かした包摂的な社会の構築に向けた社会的実践となりうるだろう。

引用文献

Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7, 335-342.

Bamberg, M. (2003). Positioning with Davie Hogan - Stories, tellings, and identities. In C. Daiute & C. Lightfoot (Eds.), *Narrative analysis: Studying the development of individuals in society*. London: Sage（http://www.clarku.edu/~mbamberg/positioning_and_identity.htm アクセス日, 2013年10月28日）.

Bamberg, M. (2004a). "We are young, responsible, and male": Form and function of 'slut-bashing' in the identity constructions in 15-year-old males. *Human Development*, 47, 331-353.

Bamberg, M. (2004b). Talk, small stories, and adolescent identities. *Human development,* 47(6), 366-369.

Bamberg, M., & Georgakopoulou, A. (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text & Talk*, 28(3), 377-396.

Charmaz, K.(2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis.* Pine Forge Press.

Coupland, N. & Jawarski, A. (2009). Social worlds through language. In Nikolas Coulpland & Adam Jaworski (Eds.), *The new sociolinguistic reader* (pp. 1-21). New York: Palgrave Macmillan.

Davies, B. and Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 20, 43-63.

De Fina, A. & Georgakopoulou, A. (2012). *Analyzing narrative: Discourse and sociolinguistic perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.

Edley, N. (2001). Analysing masculinity: Interpretative repertoires, ideological dilemmas and subject positions. Discourse as data: *A guide for analysis*, 189-228.

Edwards, D. & Potter, J. (1992). *Discursive psychology.* London: Sage Publications.

Garfinkel, H. (1967). *Studies in ethnomethodology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

ガーフィンケル, ハロルド 山田富秋・好井裕明・山崎敬一（訳）(1987). エスノメソドロジー―社会学的思考の解体　せりか書房.

Korobov, N. (2010). Discursive psychological approach to positioning, *Qualitative*

Research in Psychology, 7(3), 263-277.
Korobov, N. (2013). Positioning identities: A discursive approach to the negotiation of gendered categories. *Narrative Inquiry*, 23(1).
Potter, J. (1996). *Representing reality: Discourse, rhetoric and social construction.* Sage.
Potter, J. & Wetherell, M. (1987). *Discourse and social psychology: Beyond attitudes and behaviours*. London: Sage Publications.
Silverstein, M.（2007）.How knowledge begets communication begets knowledge: Textuality and contextuality in knowing and learning. *Intercultural Communication Review* , 5, 31-60.（シルヴァスティン･M. 榎本剛士･永井那和（訳）（2011）. 知識とコミュニケーションの弁証法：知ること、学ぶことにおけるテクスト性とコンテクスト性　鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘（編著）, 異文化コミュニケーション学への招待　みすず書房 pp. 288-330）

審 査 結 果 の 要 旨

1. 本論文の学問的背景

今日、がんは日本における死因の第一位であり、国民の二人に一人ががんに罹患するといわれている。これを受け2006年には「がん対策基本法」が制定され、国家レベルでがんへの取り組みが実施されてきている。また、かつては「死に至る病」というイメージのあったがんであるが、近年は医療技術の発展を背景に、早期発見により治療を施せば予後は良好である。さらに、在宅医療・外来化学療法の整備や医療機関への入院期間短縮化といったことも後押しして、がん治療を終えた患者たちが社会復帰を果たし通常生活を営むケースは珍しいことではなくなってきている。がん患者を取り巻くこのような環境の変化は、これまで主として医療という特定の場に限定されていたがん患者やがん罹患経験者へのケアとサポートの場を、その外、つまり地域コミュニティへと拡張しつつある。

21世紀に入ってからは、日本でも、がん患者やがん罹患経験者のみならず、医療関係者や一般市民など幅広い層の人々が参加する「参加型がんチャリティ･イベント」が開催されるようになった。これは、地域コミュニティでがん患者やがん罹患経験者を支える具体的な例といえる。本研究は、この参加型がんチャリティ・イベント

の一事例である公益財団法人日本対がん協会主催の「リレー・フォー・ライフ（Relay For Life、以下RFL）」の参加者同士のディスコース実践を研究の遡上に載せることで、病者と非病者の間に立ち現れる病気の有無に基づく差異化はいかにして生まれ調整され得るのか、また、差異化による両者の分断はいかにして起こり得るのかを考察する。これにより本研究は、多様性を許容し共生・協働を可能にする包括的な社会の構築に示唆を与える知見を提供することを目指す。

2. 本論文の研究テーマと研究方法論 (methodology) および方法 (methods)

2.1 研究設問

本研究の具体的な研究設問は、「参加型がんチャリティ・イベントの参加者のコミュニケーションの中で生起する病気に基づく差異化が、どのようにして参加者同士の関係の分断につながっていくのか」である。以下は、本研究設問に答える上での具体的な４つの下位設問である。

下位設問１： どのような時に病気に基づく差異化が起こるのか。

下位設問２： 差異が生じた場合、イベント参加者たちは、どのようにして差異を管理・調整して分断に対処するのか。

下位設問３： イベント参加者たちは、どのようにして差異を管理・調整できなく（あるいはしなく）なり、分断されていくのか。

下位設問４： イベント参加者たちが分断されていく過程で、どのようなマクロ社会的なディスコース資源が使用されるのか。

2.2 研究方法論

本研究は、その認識論的立場を社会的構築主義に求め、この立場を背景に20世紀後半以来英国を中心に発展を遂げてきたディスコース心理学（discursive psychology）の方法論に依拠したディスコース分析手法を採用するものである。ディスコース心理学の分析手法は、言語使用の遂行的性質を理論化した発話行為理論を基盤として発展してきたものである。そのため、本分析においては、語り手がディスコース資源を用いて、個人がどのように自他の利害関係やアイデンティティなどを相互行為のなかで調整しているかに着目する。行為のもつ意味は社会的相互行為のなかで生まれると前提するディスコース心理学においては、従来の心理学にみられるような、特定の行為を説明する上で個人の社会的属性（例えば性別、年齢、職業）

や内的属性（例えば個人の信念、態度、パーソナリティ）を用いるアプローチは採らない。そのため、ディスコース心理学は社会心理学における言語論的転回と位置づけられている。

また、本研究では、人びとの言語使用（コミュニケーション）の流れの中で瞬間的、流動的に現れ変化する自己（a sense of self）やアイデンティティの側面を捉えるための理論的概念である「ポジショニング」を分析概念として用いている。この概念により、「語られたもの」の中で人々がどのように描写され、関連付けられているのか、「語られたもの」が語り手と聴き手の間でどのような相互行為を可能にしているのか、そして「今、ここ」の発話出来事を越えて、語り手が安定した自己を確立するために参照する社会的言説としてのマスターナラティヴは何かという問いを検討することが可能となる。

2.3　研究方法

本研究は、「参加型がんチャリティ・イベントの参加者のコミュニケーションの中で生起する病気に基づく差異化が、どのようにして参加者同士の関係の分断につながっていくのか」という研究設問に答えるべく、以下の２つの事例研究を実施している。

まず事例研究１では、RFL参加者の間で交わされた、RFL参加準備からRFL終了までの一連の電子メールのやり取りが、ポジショニングの概念に依拠して経時的に分析されている。具体的には、イベント参加者間の差異が管理・調整されていく過程および差異化が対処されないことによって引き起こされる距離化・分断の過程におけるディスコース実践のあり方が描出されている。

続く事例研究２では、事例研究１と同一のRFL参加者へのインタビュー調査のデータが分析の対象となっている。事例研究２の目的は、事例研究１で明らかにされた差異から分断への過程の理解をさらに深化させることである。ここでは、分断過程において話し手によって参照される社会的言説としてのマスターナラティヴの分析がなされている。具体的には、イベント参加者の語りの中で繰り返し現れる複数の説明構築の方法を検討することで、「行為、出来事、その他の現象を特徴づけ、評価する際に用いられる、繰り返し使用される言い回しの体系」としての「解釈レパートリー」を同定している。解釈レパートリーの分析には社会構成主義版グラウンデッド・セオリー法を援用している。

3. 本論文の構成と骨子

3.1 本論文の構成

本論文は全７章で構成されている。

第１章の序論では、研究の背景および目的、本論文が立脚する認識論、方法論、研究手法、本研究の意義を要約し、章末で論文全体の構成を提示している。

第２章では、病気をテーマとした参加型チャリティ・イベントの背景およびイベントに関連した先行研究と、「病いのナラティヴ」研究を概観している。ここでは、これまでの先行研究においてイベント成否に多大な影響を与えるであろうイベント参加者間のコミュニケーションの問題がいかに看過されてきたかを指摘するとともに、この問題に分析のメスを入れる必要性を提起している。さらに、病いの意味を研究する枠組みとしてこれまで多用されてきた「病いのナラティヴ」研究を概観し、イベントのような、病者のみならず医療関係者、一般市民といったさまざまな範疇に属する人々の相互作用の場において立ち現れる病いの意味を分析する上でこの枠組がもつ限界を指摘している。そして、この枠組に替わる相互行為的視座を提供する研究アプローチとして、近年のディスコースとアイデンティティ研究を参照し、本研究での方法論的枠組みについて論じている。

第３章では、本研究が依拠する方法論的枠組みであるディスコース心理学の概要を示し、その上で本論文が分析概念として採用する３つの鍵概念について解説を述べている。まず、言語や非言語のコミュニケーションに通じて人々が何を為しているかという、コミュニケーションの行為的側面に関心を寄せるディスコース心理学は、イベント参加者たちがコミュニケーションを通じてどのような関係を切り結んでいるのかという動的な現象を捉える上で有用であることをここでは論じている。さらに、本章においては、ディスコース心理学の歴史的背景、特徴、そして質的研究における位置づけの概観を提示し、ディスコース心理学に向けられる批判についての言及およびこれに対する本研究の立場も論じている。ディスコース心理学の概要に加え、本章では、分析に用いる３つの鍵概念として、特定の発話の特徴（音、単語、表現、スタイルなど）が言語外的な範疇（社会集団、社会的表象、イデオロギーなど）と結びついていることを示す「指標性（indexicality）」、従来のナラティヴ研究では検討の対象とされて来なかった、非典型的で、即興的、断片的な会話である「スモール・ストーリー (small stories)」、そして前述した「ポジショニング (positioning)」の説明を提示している。

第４章では、本研究が採用する質的研究において重視される観察対象となる現象のコンテクストの可視化を試みている。具体的には、まず、本研究において重要なコンテクストとなるがん啓発チャリティ・イベント（RFL）について、その歴史的起源、活動趣旨、具体的な活動内容などを含む概要を記述している。さらに、研究参加者、分析対象となるデータの種類とその構築過程の記述を行っている。続いて、データ収集・分析における倫理的配慮について述べている。最後に、本研究の主要なデータである電子メールのやり取りとインタビュー・データを補完する文書資料として、調査者による観察メモとRFLの主催団体である日本対がん協会の会報紙「対がん協会会報」が利用されたことを説明している。イベント参加中に調査者によって記録された観察メモは、本研究の研究設問の焦点化とデータ分析に有益な情報を提供する資料として用いられている。会報紙については、その内容が計量テキスト分析的に検討され、会報の中で頻繁に用いられる語彙、表現、語り方がイベント参加者によって共有される利用可能な語りの資源として同定され、RFL参加者のコミュニケーションにおいてイベントについて前提可能となる知識を可視化することに貢献している。

第５章では、本研究の研究設問に答えるべく実施したふたつの事例分析とその結果を提示している。事例研究１では、RFL参加者である医療従事者とがんサバイバーである本論文の著者とのSNSを通じた出会いから、RFLに初参加した医療従事者がイベントから離脱して行くまでの過程で二人の間で交わされた電子メールを経時的に分析することで、両者が差異化され分断されていく過程のディスコース実践を明らかにしている。続く事例研究２では、事例研究１から導出された分析結果をさらに深化させることを目的に、RFL参加の振り返りの医療従事者の語りをデータとして、自らをイベントから切り離していく上で医療従事者が利用した解釈レパートリーの同定を試みている。ここでは、事例研究１で分析の焦点とされた二者間の相互作用という「今、ここ」のミクロ・コンテクストを越えた、コミュニケーション参加者たちの語りを取り巻くマクロ社会的に流布するイデオロギーを分析の射程に含んでいる。

第６章では、前章の分析結果に基づき、研究設問への回答と考察を述べている。そして更に、総合考察として、本研究の成果を研究対象、理論、方法論の３つの観点から評価するとともに、本研究から導出された知見がもつ実践的意義についても議論している。

第７章では、本研究のまとめを提示し、続いて本研究に関する再帰的考察、限界と今後の展望を述べている。

3.2　本論文の骨子

本論文が着目するがんをテーマとした「参加型チャリティ・イベント」は80年代半ばの北米にその起源をもち、その主な目的は、研究資金の調達、がんについての啓発活動、参加者同士の交流、病気や病者への理解を高めることといったものである。いわば「医療の縁側」とも呼べるこのイベントは、医療機関の外においてがん患者/がん罹患経験者を支援する場として今後益々その重要性を増すものと思われるが、その歴史の浅さから、現時点では先行研究の蓄積が十分とはいえない。

現在利用可能なイベントの先行研究には、イベントに対して肯定的・促進的な立場からイベントを活性化するための要因を同定する探索的研究の流れと、イベントに対し否定的・懐疑的な立場からイベントの啓発的側面がもつ権力性を問題視する社会学的研究の流れがある。しかし、どちらの先行研究の流れにおいても、イベントが参加者同士の相互作用によって成り立っているというコミュニケーション的視点が看過されている。本論文は、イベントに関する先行研究のこの欠落点に切り込んでいる。本論文においては特に、イベント参加者間の相互行為の中でしばしば観察され、イベントの成否に多大な影響を与えると思われる、「病気の有無に基づく参加者間の差異化と分断の過程」に分析の照準を合わせている。

本論文は、社会的現実がディスコース相互行為の過程で創り出されるものであると考える社会的構築主義に依拠するディスコース心理学を方法論とし、指標性、スモール・ストーリー 、そしてポジショニングという分析概念を用いて現象に迫る。本論文はまた、医療における生物医学的偏重性への批判として生まれ、「疾患」(disease)とは異なる、患者の視点や経験に根ざした「病い」(illness)の語りに耳を傾ける「病いのナラティヴ研究」の枠組みに対し、そのコミュニケーション論的拡張を試みている。ポジショニング概念を用いたディスコース分析を採用した本研究は、語りの内容そのものに注目するのではなく、特定の状況で、特定の他者との間で、特定の目的の下に行われる相互行為であるディスコース実践において、語りによって話者がどのような行為を為しているかに注目する。本研究はこの新たなアプローチを採用することによって、個々の体験ナラティヴから「病気の意味」を読み解こうとする静的な病いのナラティヴ研究では捉えられない、相互行為の中で現れる病気の意

味を描出している。

病気に基づく差異の創出と、差異化による分断の過程を分析した事例研究１と、差異化による分断に利用可能なマクロ社会的ディスコース資源を同定する事例研究２から導出された研究結果は以下の通りである。

(1)　病気に基づくイベント参加者間の差異化の契機は、イベントの正当な成員性を示す必要が生じたときに見られた。

(2)　病気に基づく差異化が生じた際に、イベント参加者たちは、(a) トピックの回避（互いの間に序列化をもたらすようなトピックに敢えて触れないようにする)、(b) 範疇のずらし（「医療従事者」や「がんサバイバー」といった範疇を連続体として捉え、相互の関係に距離化が生じないよう調整する)、(c) 異なるコンテクストの参照（特定のコンテクストにおいて互いの関係性に序列化が生まれるような場合、それを打ち消すために別のコンテクストを参照する）といったディスコース方略を用いて差異化に対処していた。

(3)　イベント参加者間の病気に基づく差異化が強化され、両者が分断される過程においては、コミュニケーション参加者たちが、「がん患者 vs 非がん患者」、「がんサバイバー vs医療関係者」といった対照ペアの使用を反復的に用いるディスコース実践を行うなかで、差異化への修正が為されぬまま参加者同士の距離が離れていくことが観察された。ここでは、ナラティヴのふたつの次元、つまり「語られた出来事」とその語りを展開する「今、ここ」の相互行為である「語る出来事」が、具体的な意味が文脈によって定められる直示表現によって類推的につながり、ふたつの次元の間に並列的な構造が喚起されていた。

(4)　差異化による分断の過程では、語りによって創り出される「今、ここ」で展開する相互行為以上に、「語られた内容」に強く意識が向けられることによって、コミュニケーション参加者の間で差異化への対処がなされなくなり、結果的に無意識のレベルで両者の関係が分断されて行く可能性が示唆された。

(5)　差異化による分断に利用可能なマクロ社会的ディスコース資源としては、(a)「強制される医療者」（医療的知識を求める患者によって負担を強いられたという医療者の被害者性を構築)、(b)「精神的な病気」（特定の他者を精神的に病む者として「病気化」し、理解不可能な対象として構築)、(c)「排除」（対象を二分法で描出し、一方が他方に対して圧力をかけて関係を分断するとい

うシナリオを構築)、(d)「個別性」(結局人は分かり合えないという虚無主義的な説明により不可避的な違いを構築)の４つのレパートリーが同定された。

4. 本論文に対する評価

4.1 本論文の貢献

本論文の貢献は、学術的、実践的、社会的貢献と多岐にわたる。その中でも特に以下の８点を本論文の主要な貢献としてここに挙げたい。

(1) 本研究は、今後益々その重要性を増すと思われる、地域において一般市民を巻き込みながらがん患者/がん罹患経験者を支援する参加型がんチャリティ・イベントに考察のメスを入れた、新規性の高い研究であるといえる。いわば「医療の縁側」ともいえるイベントに対し経験的研究を実施した先駆的な取り組みである。

(2) 本研究は、チャリティ・イベントに関する研究蓄積の中でこれまで看過されてきたイベント参加者間のコミュニケーション実践に着目した、世界でも例を見ない研究である。さらに、本研究が分析の対象としたデータは、最終的にはイベントから距離を取って行くこととなった参加者のイベント参加前からイベント参加後の過程における語りを含むものであり、従来であれば可視化が困難である離脱者の事例の分析に成功したことも、本研究の価値を高めるものであると考える。

(3) がん患者を対象としたコミュニケーション研究においてポジショニング分析が用いられた例は日本では希少であり、その点においても本研究は新規性のあるものと位置づけることができる。

(4) 本研究は、分析においてポジショニング概念を用いることで、「当事者だからわかる」、「当事者でないからわからない」といった本質主義的な議論に陥ることなく、人々が属する特定の範疇を可変的なものとして、自他の関係性を創出していく道が開かれていることを示したといえる。

(5) 本研究は、日本対がん協会の会報紙の計量テキスト分析的検討も含め、データ分析において前提となるコンテクストの記述を丁寧に行っている。このコンテクストに関する濃密な記述は、他の類似したコンテクストへの本研究結果の転用可能性を高めているといえる。

(6) 本研究は、医療における生物医学的偏重性への批判として生まれた「病いのナラティヴ研究」の枠組みを、コミュニケーション論的に拡張することに成功した。本研究が採用したポジショニング概念を用いたディスコース分析は、個々の体験ナラティヴから「病気の意味」を読み解こうとする静的な病いのナラティブ研究では捉えられない、自他の「間（あいだ）(inter-)」に現れては変化する「病気の意味」を動的に捉えることを可能にし、相互行為の中で現れる流動的な病気の意味に着目する意義を本論文が提起することに貢献した。

(7) 本研究は、近年その重要性の認識が高まりつつある、研究の社会的貢献を明確に意図した厚生言語学（welfare linguistics）の一事例に該当するものであると考える。世界規模でのグローバル化、日本国内における少子高齢化や女性の社会進出といった潮流に後押しされ、日本においては社会活動のさまざまな場面において多様な背景を持つ人々が協働していくことが今後益々求められることは必至である。その点においても、本研究は、包摂的社会の構築に向けて示唆に富む言語実践のあり方に関する知見を提供しているといえる。

(8) 本研究が描出した差異化の対処に用いられたディスコース方略や、差異の創出および差異化に基づく分断を生起する契機は、人種、民族、国籍、ジェンダーなどの異なる範疇が錯綜する多文化社会における差異と分断の問題を検討する上でも、示唆に富む貴重な知見であるといえる。さらに、本研究が採用した方法論的アプローチは、相互行為の流動性に着目することによって、非本質主義的に差異と分断に関わる事象を理解し問題解決の糸口を見出すことを可能にする点で、国際コミュニケーション・異文化コミュニケーション研究においてもその有用性が今後大いに期待される。

4.2 本論文の限界と今後の展望

今後の課題としては、主に以下の５点が期待される。

(1) 今回本研究で分析対象となったデータは、RFLのイベント活動の中で生起したものではない。研究倫理および研究の実行可能性にも配慮した上で、非言語的要素も含め、イベント活動の中で自然に立ち現れるコミュニケーション実践の分析に取り組んでいくことが今後の課題となる。

(2) 本研究の事例研究１では、電子メールのやり取りが分析対象となっている。しかし、今回の研究では、コンピュータ・ネットワークを介したコミュニケーション（CMC）のもつモノローグ性が分析の中で十分に議論されていたとは言えない。今後はCMCに関する先行研究を充実させることで、ポジショニングとの関連を含め、対面コミュニケーションとは異なる特徴をもつCMC上のディスコース実践のあり方を注意深く検討する必要がある。

(3) 本研究で分析の対象となったデータは日本語のデータであるが、ポジショニング分析を実施する上で、日本語がもつ言語特性が十分に検討されていたとはいえない。今後はこの点についても分析の射程に含める必要がある。

(4) 本研究を土台に、将来的には、多様な背景をもつより多くのRFL参加者との相互作用を考察の対象とすることによって、データ間の比較と対比を通して、研究結果をより精緻化された検証可能な仮説へと昇華させることが期待される。

(5) 本研究では病気に基づく差異化とその結果としての分断のみが際立つ結果となったが、今後はポジショニングというアプローチがもつ流動性をより生かすことが期待される。

5. 結論

以上述べてきたように、本論文は、今後その役割の重要性を増すと思われる、地域コミュニティにおけるがん患者/がん罹患経験者を支援する試みとしての参加型がんチャリティ・イベントに着目し、病気に基づく差異が顕在化し分かたれていく過程の一端を、イベントの参加者たちのコミュニケーション実践を通して描出することに成功した。これにより、当事者性に基づく差異が創出される契機と、差異化に対処するために人々が採るディスコース実践、また、差異化の結果として人々の間に分断が起きる時に、そこにはどのような背景や契機が存在するのかが明らかになった。さらに、これまで病者を理解する際の研究枠組みとして多用されてきた「病いのナラティヴ」研究では捉えきれなかった、人々の相互作用の中で交渉され、変化する病いの意味を、ポジショニング概念を用いたディスコース分析によって本研究は明らかにした。研究の新規性、理論的・方法論的拡張、そして、社会的実践に還元しうる知見の提示といった意味において、本研究は大きな貢献を果たしたといえよう。

最終審査における審査委員とのやりとりのなかでは、類似するものの同一ではない概念間の差別化をより明確にする必要があることが確認された。しかし、それ以外の審査委員による質問に対しては、岡部氏は的確に対応していた。岡部氏は、修士論文として、英語種に対する偏見に関する量的研究論文を執筆し、今回は自らのがんサバイバーとしての経験から着想を得た本博士論文を、質的研究アプローチを用いて執筆した。岡部氏の研究には、一貫して、人間がいかにして他者と向き合い、他者と共生し得るかを問う姿勢が窺われ、今後社会言語学者として、厚生言語学の発展にも大いに貢献し得る可能性を有していると考える。岡部氏の今後の成長と活躍が期待される。

以上、審査委員会は全会一致で本論文を優れた学問的業績と判断し、博士（国際コミュニケーション）の学位を授けるのに価するものと認める。